



## 秋田県男鹿方言の時間表現

著者	近藤 清兄
雑誌名	東北大学言語学論集
号	6
ページ	59-66
発行年	1997-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129577">http://hdl.handle.net/10097/00129577</a>

## 秋田県男鹿方言の時間表現

近藤 清兄

キーワード: 秋田方言, 方言文法, テンス, アスペクト, 既然相 (realis)

### 0. 序

本稿は筆者の一連の研究に連なり, 秋田県男鹿方言の記述的描像に取り組む。ここで扱うのは時間表現であるが, 形態論を中心にし, 意味論・統語論的観点からも考察していく。

男鹿方言の定義については近藤 (1995) を参照されたい。また, ここで使用するローマ字表記は 95 年式改である。近藤 (1996a, b) 参照。動詞の分類についても近藤 (1996a) を見られたい。

### 1. 三つの次元について

本稿では次に挙げる三つの次元によって時間表現を分類する。時間表現研究の枠組みは近年顕著な改新を遂げつつある。そのきっかけの一つともなったフィリピン諸語の研究における新知見に筆者も影響を受けており, 「三つの次元」はそれを反映したものである (柴谷 (1986), また『言語学大辞典 術語編』を参照した)。

- (1) 未然／已然 (irrealis vs. realis)
- (2) 点／継続 (punctual vs. durative)
- (3) 未完了／完了 (imperfect vs. perfect)

即ち,

- (1) はある動作がまだ始まっていないか, すでに始まっているかの別である。
- (2) はその動作が一点であるか, 時間的な幅を持つかの別である。
- (3) はその動作がまだ終わっていないか, もう終わったかの別である。

実は (1) の軸と (3) の軸は直交しているわけではない。つまり独立ではない。というのも, ある動作の完了／未完了が問題になる以上, その動作は既に始まっているだろうからである。まだ始まっていない動作について, それが終わっているかどうかを問題にするのは一般には意味がなく, この意味において「完了」は「已然」を含意する。ただし, 命令文について完了／未完了の別があるということはいえ, 命令文における動作が「未然」であるとすれば, この場合軸 (1) と (3) が独立であるという体系もありうる。ここでは命令と否定について「未然」として扱うことは避け, 別の機会に改めてそれぞれを論ずることにした (「注に代えての追記」

参照).

そういったわけで、上記の3本の軸は必ずしも互いに直交しているわけではないのだが、分類の上で便利なので採用する。

以下に挙げる動詞の形式には、上記の三点に基づきベクトルを割り当てることにする。(已然, 継続, 完了) について、有を1, 無を0で表す。

例: (1, 0, 1) 已然, 点, 完了

(0, 1, 0) 未然, 継続, 未完了

なお、以下では主文について主に論ずることにし、従属節との関係に関する立ち入った議論は避けた。単純なモデルから出発するのが得策と考えたためであり、これも他日を期したい。

## 2. eda, atá とその派生形態

存在を表す動詞 *eru* に完了の助動詞が承接した *eda* は、形の上では (1, 1, 1) だが、実は意味的には (1, 1, 0) を表している。標準語の「いる」にあたるのである。「いた」にあたる (1, 1, 1) の表現は存在を表す *aru* に完了の助動詞が承接した *atá* が -TE 形についた *edatá* となる。本稿では以下の記述において *eda* とその派生形を未完了の形式として扱う。

この *eda*, *atá* は動詞の -TE 形と融合して継続相に対応する形式を作る。

(0, 0, 0)	(1, 1, 0)	(1, 1, 1)
	<i>arù</i>	<i>atá</i>
	<i>eda</i>	<i>edatá</i>
<i>kagù</i>	<i>ka'edèda</i>	<i>ka'edàta</i> ( <i>ka'edèata</i> )
<i>tōbu</i>	<i>tondeda</i>	<i>tondatá</i> ( <i>tondeatá</i> )
<i>mirù</i>	<i>midedà</i>	<i>midatà</i> ( <i>mideàta</i> )
<i>niru</i>	<i>nideda</i>	<i>nidatá</i> ( <i>nideatá</i> )
<i>kurù</i>	<i>kitedà</i>	<i>kitatà</i> ( <i>kiteàta</i> )
<i>suru</i>	<i>siteda</i>	<i>sitatá</i> ( <i>siteatá</i> )

しばしば *sinu* (死) は意味的に振る舞いを異にするので、以下ではI類無核の例として上のように *tōbu* (飛) を用いることがある。

### 3. 時間表現の諸相

#### 3-0.

ここでは1. で挙げた三つのプロパティの有無に沿って、それに対応するテンス／アスペクト表現の形式と意味的機能とを見ていくことにする。

機械的にその形式を(正しいアクセントとともに) 作することは可能であり容易であるが、動詞自体の持っている意味によっていささか形式と意味的機能との間に他との不整合が生ずる。この件に関してはその都度コメントを加える。

#### 3-1. (0, 0, 0)

未然, 点, 未完了の形式である。終止形(長語幹に語尾 -u が付いた形) がこれにあたる。意味的には(1) 未来用法(2) 習慣(3) 時間に中立な用法がある。

kagù sinu mirù niru kurù suru

##### (1) の例

— omæ kurùu. お前来るか?

— egu. 行く。

##### (2) の例

a'e tabagomo suusì sagekomo nomùmono. あいつは煙草も吸うし酒も飲むもの。

omædaba satèba hugueru. お前はさアってエとふくれる。

(3) の例: 「真理」とは限らず, 正しいかどうか検証されていなかったり, 証明されていなかったとしても, とにかく命題の形で述べられているもの(特に時を表す副詞句を持たない場合) はこれに入る。しかし習慣や未来と必ずしも区別は容易でない。

huğùno kimó taberebà sinu. ふぐの肝を食べると死ぬ。

ある種の動詞はこの形が未来ではなく現在用法を持つ(3-5. 参照)。

#### 3-2. (0, 0, 1)

未然, 点, 完了。

完了は已然を含意するという考え方から, ここは空であるとしておく。

3-3. (0, 1, 0)

未然, 継続, 未完了.

eru とその派生形.

ka'edèru tonderu miderù nideru kiterù siteru

未来について言及するとき eda とその派生形を用いることができない.

asitano emagoro kogosà eru. 明日の今頃ここにいる.

ka'edèru miderù nideru siteru

典型的には未来のある幅のある時間帯での動作の継続を表す. 3-2. のような, 未来の一点で既に終わっている動作を表す用法もある.

sinderu は, 未来のある時点で既に死亡していることを表す (推量の助詞 -bé とともに現れることが多い).

kiterù は, 未来のある時点で既にそこに来ていることを表す (これも -bé を伴うことが多い).

3-4. (0, 1, 1)

未然, 継続, 完了.

完了は已然を含意するという考え方から, ここは空であるとしておく.

3-5. (1, 0, 0)

已然, 点, 未完了.

形は 3-1. (0, 0, 0) と同じく終止形なのだが, ある種の動詞は未来というより現在の用法を持つ. 可能 (能力) ・ 必要 ・ 思考 (感情) などがそうである.

haga'ègu. はかどる. はかが行く.

haratàzu ná. 腹立つなあ. (= kimayàgeru ná.)

oyoğerù 泳げる (泳ぎの能力がある)

wara'eru 笑える

simu (傷が) しみる

yamù (傷が) 疼く

eru 要る (I 類. 存在を表す eru は II 類)

最近の用法 (若者語) に次のようなものがある.

sa'eko ugerù. [文字通りには] 最高 (に) 受ける (凄く可笑しい, 面白い)

3-6. (1, 0, 1)

已然, 点, 完了.

完了の助動詞が承接した形式 (ただし eda は例外) がこれに該当する.

ka'edà sinda midá nida kitá sita

過去のある時点に起きた動作 (継続性はないか, 問題にしていない) をあらわす.

「問題にしていない」というのは, 明らかに習慣を示唆する副詞句がある場合を含む.

mugasi yogù yondamònda. 昔よく読んだもんだ.

大過去用法に該当する形式は 3-8. 参照.

3-7. (1, 1, 0)

已然, 継続, 未完了.

eda とその派生形式がこれに該当する. また, arù の終止形は意味上ここに属す.

ka'edèda tondeda midedà nideda siteda

典型的には現在の時点を含む幅のある時間での進行中の動作を表す.

—moededaga? 燃えてるか.

—nantò, bonbodo moededahà. 燃えてるたって, ぼうぼう燃えてらァ.

sindeda は, 死につつあるという意味ではなく, 既に死という (一回性の) 動作が起こってしまっても終わり, その状態が (通常非可逆の過程だから当然だが) 続いていることをさす.

kitedà は, 来つつあるという意味ではなく, 既に来て今ここにいるという意味である.

いま眼前に起こっていることを活写する, いくぶん主観的な感じの表現がある.

ka'edèra tondera miderà nidera sitera

kimidəntamono arutèra. 木のようなものが歩いてる [福音書の一節を訳してみた].

sindera

kiterà

これは ka'edèru + -a, etc. であろうと思われるが, 回想の助詞 -ke が承接しうる点が要注意である.

この形式は modality もしくは evidentiality といった話題の中で扱うべきかも知れないので, ここでは深入りを避ける.

伊藤理恵子君 (聖霊女子短期大学英語科) によれば, 西仙北町刈和野では, ka'edèra, etc. は単に (1, 1, 0) を表し, ka'edèda, etc. は (1, 1, 1) を表すという.

3-8. (1, 1, 1)

已然, 継続, 完了.

atá とその派生形式がこれに該当する.

ka'edàta tondatá midatà nidatá sitatá

典型的には, 過去のある幅のある時間に進行中だった (今はもう終わったか, 視野の中にな  
い) 動作を表す. また, 過去のある時点で既に起こってしまっていた動作 (大過去) もこの形が  
担っている. 3-6. 参照.

sindatá は死につつあったという意味ではなく, 過去のある時点でもうその時既に死という  
一回性の動作が起こってしまっていたことをさす. 大過去用法である.

kitatá は来つつあったのではなく, 過去のある時点で来るという動作がもう起こってしまっ  
ていたことをさす. 大過去用法である. その一方で, 過去の習慣を表すこともあるので, その場  
合は (1, 1, 1) としてよい.

4. おわりに

小論を執筆するにあたり, いずれも聖霊女子短期大学 2 年生の阿部恭子 (由利郡由利町), 伊  
藤理恵子 (仙北郡西仙北町刈和野), 榎知香 (秋田市四ツ小屋), 及び三浦淳子 (由利郡大内町) 各  
君との討論から極めて有益な情報と示唆を得た. 無断引用こそしないまでも, 各君の卒業課題  
(小論文) の該当箇所を一々指摘することを厭うた失礼を詫びつつ, ここに記して謝意を表す  
ものである.

注に代えての追記

否定と未然との関係については本文では触れないことにしたが, ひとつの興味深い現象が  
あるのでここに簡単に述べておきたい.

repooto maðà kaganæbè. レポートまだ書いてないだろ.

Buronsònte maðà sinanæbe? (チャールズ・) ブロンソンってまだ死んでないだろ?

— ano eeğa midagà? あの映画見た?

— minæ. 見てない.

それぞれ, 文字通りには「書かない」「死なない」「見ない」に相当する形式である. それを  
「(まだ) 書いていない」「(まだ) 死んでいない」「(まだ) 見ていない」の意で用いている.

東京方言には古くこの用法があったようだ.

— 花はどうだい.

— 花ア…見ねエ.(見ていない, 見なかったの意)

(古今亭志ん生「百年目」CD, ポニーキャニオン FDLA4018)

— おかしいじゃねえか, え, 朝晩会ってるあたしに, 「ごぶさたしました」って, 大変  
会わないようだが…(会っていない, 会わなかったの意)

(古今亭志ん生, 同上)

— 私は三日もものを食べません.(食べていませんの意)

(古今亭志ん生, 「千早振る」CD, テイチク TETR-20020)

なぜこういう用法があり得るのか. その鍵は未然 (irrealis) という点にある. どうせ未然なのであるから, 完了かどうかは問題にしないでよいということなのではないだろうか.

#### 参考文献

- 金田章宏 (1984) 「山形方言の動詞のテンス」『国文学 解釈と鑑賞』49 (1), 至文堂, 東京.
- 工藤真由美 (1986) 「アスペクトについてのおぼえがき」『国文学 解釈と鑑賞』51 (1), 至文堂, 東京.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房, 東京.
- 近藤清兄 (1995) 「秋田県男鹿方言のローマ字表記について」『聖霊女子短期大学紀要』23, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (1996a) 「秋田県男鹿方言の動詞形態論」『聖霊女子短期大学紀要』24, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 近藤清兄 (1996b) 「秋田県男鹿方言の形容詞形態論」『東北大学言語学論集』5, 東北大学言語学研究会, 仙台市.
- 近藤清兄 (1997a) [近刊] 「秋田県男鹿方言の名詞形態統語論」『聖霊女子短期大学紀要』25, 聖霊女子短期大学, 秋田市.
- 佐藤稔 (1982) 「秋田県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会, 東京.
- 柴谷方良 (1986) 「フィリピン諸語の動詞」『国文学 解釈と鑑賞』51 (1), 至文堂, 東京.
- 鈴木泰 (1986) 「テンス」『国文学 解釈と鑑賞』51 (1), 至文堂, 東京.
- 鈴木泰 (1996) 「アスペクト —— チベット語と古代日本語の evidentiality に関連して ——」『国文学 解釈と鑑賞』61 (7), 至文堂, 東京.
- 北条忠雄 (1995a) 『秋田ことば』秋田魁新報社.
- 北条忠雄 (1995b) 『解説秋田方言 —— その諸相を探る ——』『解説秋田方言』刊行会, 秋田市.
- 町田健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク, 東京.



森山卓郎 (1994a) 「ル対タの対立が示すものは?」『国文学 解釈と教材の研究』39 (14), 至文堂, 東京.

森山卓郎 (1994b) 「アスペクトとは?」『国文学 解釈と教材の研究』39 (14), 至文堂, 東京.

山浦玄嗣 (1986) 『ケセン語入門』共和印刷企画センター, 大船渡市.

李美淑 (1996) 「スルとシテイル —— 韓国語と日本語の動詞のアスペクト ——」『国文学 解釈と鑑賞』61 (7), 至文堂, 東京.

Kiyose, Gisaburo N. [清瀬義三郎則府] (1995) *Japanese Grammar: A New Approach*, Kyoto: Kyoto University Press.

『言語学大辞典 6 術語編』(1996)「既然法と未然法」の項, 三省堂, 東京.

(聖霊女子短期大学英語科講師)